

鈴木伸哉¹・齋藤 葵¹: 遺跡見学会における自然史・植生史研究の展示Shinya Suzuki¹ and Aoi Saito¹: Research presentations of natural history and historical botany at an exhibition of an archaeological site

遺跡の発掘調査の期間中に、発見された遺構や出土遺物を現地で展示する遺跡見学会（現地説明会）が開催されることがしばしばある。通常は来場者に制限を設けず、自治体の広報等をつうじて広く周知することもあり、遺跡やその調査の様子を実際に目にするのできる貴重な機会を求めて、遺跡の周辺地域をはじめとした広い範囲から多くの見学者が訪れる。こうした催しは多数の市民が埋蔵文化財や考古学に触れ、理解を深める場として役立っている。

筆者らはこうした機会を捉えて、発掘調査にあわせて実施された自然史・植生史学的研究の概要を遺跡見学会において展示することを試みた。成果の一端をいち早く取りまとめて紹介することによって、見学者に臨場感のある研究の様子を伝えることができた。こうした取り組みは植生史学の研究成果の公表や、自然史学的な標本の重要性への認知の向上にも有益と考え、今回の試みの内容を報告する。

見学会をおこなった道台遺跡は東京都北区赤羽台一・二丁目に位置する、先史時代から近・現代にわたる複合遺跡である。独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）による赤羽台団地建替事業に伴い、2007年から大規模な発掘調査が継続的におこなわれ、武蔵野台地の東縁にあたる赤羽台の広い範囲から、弥生時代や古代の集落跡や、近世の溝跡、近代の日本陸軍被服本廠の遺構群が発見されている。団地建替事業の最後となる発掘調査が、UR 都市機構の委託を受けた（公財）東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターにより2019年6月より始まり、2021年秋まで続く。調査期間中の2021年2月13日に、筆者ら東京都埋蔵文化財センターが団地住民を主な対象とした遺跡見学会を実施した。

この見学会では内容を時代別に分け、1. 遺跡の概要、2. 地質調査の成果、3. 戦後、4. 近代、5. 近世、6. 古代、7. 弥生時代からなる7つのテーマを設定した。このうちテーマ2と5、7において、遺構や遺物に加え、ボーリング調査や植物珪酸体分析、炭化材の樹種同定といった自然史・植生史学的な内容の展示をおこなった。

ボーリング調査の成果の展示

遠藤邦彦日本大学名誉教授らの研究グループにより、2020年7月に遺跡調査地内においてオールコアボーリング調査がおこなわれた。この結果、地表下55mに達する堆積物コア試料が得られ、これに基づいて赤羽台地域における過去数十万年間の地形や環境についての検討がおこなわれている。コア試料は半裁されて一方は分析に供され、



図1 ボーリングコア試料の展示。手前側が地表面。

残りは保存用とされることが一般的であるが、今回、遠藤名誉教授らの協力を得て、この保存用試料を借用し、展示した（図1）。

遺跡調査地内の通路を利用して、約40mの直線上にコア試料を並べた。あらかじめ平坦にならした範囲にシートを敷いて展示スペースとし、ここに半裁した塩化ビニール管に入ったままのコア試料をボール紙製の架台に置いて並べた。

「地質学ウォーク」と題して、見学者は順路に従って歩くと地表から地下に潜っていくかたちになる構成とした（図1）。並べたコア試料の横に、一定間隔において地表からの深度と海拔の値を入れ、テフラや貝化石などの産出層準にも説明文を入れた。貝塚（1977）による古地形の模式図や町田・新井（2003）による広域テフラの分布図を参考にし、見学者は堆積物が形成された当時の地形や、コア試料から見出されたテフラの給源や噴出年代がわかるようにした。

コア試料中の広域テフラの含まれる層準や、海洋同位体ステージ5.5や7のものに比定される海成層（貝化石や生痕化石が顕著に認められた）には多くの見学者が足を止め、写真を撮影していた。コア試料そのものを連続的に展示するには大きなスペースが必要であるが、屋外で開催される遺跡見学会は（天候に左右されるものの）遺跡地の空間を有効に利用できる点で、適した機会であると考えられる。

植物珪酸体分析の成果の展示

古地図などによると近世の赤羽台には一面に畑が広がっていたと推定され、発掘調査においても、畑を区画したと



図2 近世の溝跡と、植物珪酸体分析の展示。

みられる溝が遺跡の広範囲から検出された（図2）。発掘調査においては当時の植生や畑作の実態を明らかにすることを目的として、この溝内の堆積物について、江口誠一日本大学教授が植物珪酸体に基づく当時の植生や栽培植物の復原をおこなっている。未だ検討の途中であるが、当時の植生を示唆する分類群や、栽培植物（穀類）の珪酸体が同定されている。見学会では堆積物を採取した遺構の横に、分析の概要の説明文と、作成したプレパラート、植物珪酸体の顕微鏡写真を展示した（図2, 3）。溝のような、出土遺物も乏しく、それ自体には顕著な特徴が認められない遺構にも、植生史的なアプローチによって多くの知見が得られることを示すことができた。見学者にはやや難解に感じられたようであったが、普段耳にすることの少ない、また目にすることの極めて稀な、植物珪酸体を包埋したプレパラートの実物やその顕微鏡写真には一定のインパクトがあった模様である。

炭化材と樹種同定結果、電子顕微鏡画像の展示

道台遺跡からは弥生時代後期の焼失住居跡が多く検出されており、今回の調査でもこうした住居跡から炭化材が良好な状態で出土した。焼失住居跡の付近に、土器などの出土遺物とともに炭化材とその電子顕微鏡画像、エックス線CTによる断面画像、樹種同定結果をまとめて展示した。見学者は実物の炭化材と顕微鏡画像や断面画像を見比べながら見学することができた。

まとめ

以上のような展示をおこない、見学者の反応は概して良好であった。コア試料やプレパラート、植物遺体といった自然史・植生史の標本のもつ魅力が、多くの見学者を惹きつけることが感じられた。

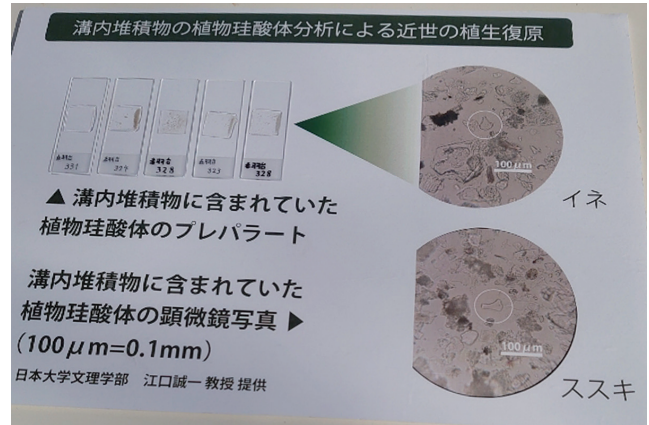


図3 溝跡から得られた堆積物の植物珪酸体プレパラート（江口誠一氏提供）。

千野（1996）が埋蔵文化財調査における植生史研究資料の保存と公開の重要性と、その憂慮すべき現状を述べてから20年以上が経つ。この間、遺跡出土資料に基づく植生史研究は大きな進展を遂げ、当時の知見を大幅に塗り替えるに至った。しかし一方で、累積する出土資料に対して保管・保存体制の整備は追いついておらず、むしろ堆積物や植物遺体、プレパラート類についてはより深刻な状況を迎えている。こうしたなか、見学会などの機会を捉えて、自然史・植生史研究やその基礎となる標本への市民の関心や理解を喚起し、それに立脚して標本の適切な保存と公開への道を探るという方法を、筆者らは模索したいと思う。

見学会の開催にあたり、遠藤邦彦氏をはじめ、杉中祐輔、是枝若菜、須貝俊彦の各氏には地質試料について丁寧なご教示を賜り、またコア試料や解説資料の準備において多大なご助力を賜った。江口誠一氏をはじめ、同研究室の江藤直、鬼崎華、小野綾子の各氏には植物珪酸体分析に関する展示において多大なご教示とご助力を賜った。記して御礼を申し上げる。

引用文献

- 千野裕道. 1996. 埋蔵文化財調査における植生史研究資料の保存と公開. 植生史研究 4: 77-80.
 貝塚爽平. 1977. 日本の地形—特質と由来—. 234 pp. 岩波書店, 東京.
 町田 洋・新井房夫. 2003. 新編 火山灰アトラス—日本列島とその周辺—. 336 pp. 東京大学出版会, 東京.
 (〒206-0033 東京都多摩市落合 1-14-2 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
 Tokyo Metropolitan Archaeological Center, 1-14-2 Ochiai, Tama-shi, Tokyo 206-0033, Japan)